

真なる世界への入場門としての超越論的現象学

島 田 喜 行

はじめに

フッサールの哲学的思索は、その始まりから、厳密な学としての哲学 *Philosophie als strenge Wissenschaft* という理念によって動機づけられていた。この理念を実現させるために、フッサールによって構想された哲学が超越論的現象学 *transzendentaler Phänomenologie* であった。しかし、フッサールは、この超越論的現象学がいかなる学問であるのか、何を探究し、何をどのように明らかにしようとするものなのか、という問いに対するよりよい説明の仕方を考えることに生涯、苦慮し続けた。フッサールの思いとは裏腹に、超越論的現象学の構想にこめられた哲学的意図は万人に容易に理解されるものではなかったのである。

エドムント・フッサール (Edmund Husserl, 1859-1938) は、その現象学によって何を探究し、どのように解明しようとするのか。この問いは、現象学的に探究されるものの意味づけをめざしており、したがって現象学そのものの特性を開示しようとするものである⁽¹⁾。

「現象学的に探究されるものの意味づけ」を適切な仕方の説明し、「現象学そのものの特性」を判明にすることはフッサールにとつても困難なことであった。この困難を生み出す要因の一つは「超越論的 *transzendental*」という術語にある。この「超越論的」という術語は、現象学そのものの特性を一言で表現する語である。しかし、この語は、フッサール自身が指摘しているように、多義的である^②。そこで、フッサール全集第7巻に収められた「カントと超越論哲学の理念」^③講演（以下、「カント講演」と略記する）を手引きにして、デカルトに始まりカントにおいて開花したとされる超越論哲学 *Transzendentalphilosophie* との関係において明確にされる限りでの超越論的現象学の特性を判明にすること、これが本論の目的である。

考察の手順は次の通りである。

まず、厳密な学としての哲学という理念を媒介として結びつけられるデカルト、カント、フッサールの関係を概観する(1)。次に、フッサールが、どのような意味でデカルトを超越論哲学の創始者として位置づけていたのかを検討する(2)。さらに、デカルトによつて創設された超越論哲学を開花させたとされるカントに対するフッサールの批判を確認したうえで(3)、フッサールの超越論的現象学が、どのような意味でデカルトとカントの超越論哲学の徹底化であったのかを考察する(4)。最後に、以上の考察を踏まえ、フッサールが超越論哲学の徹底化とともに、デカルトとカントから継承した超越論哲学（超越論的現象学）を実践することがもつ意義とその意義と不可分に一つとなつている哲学的な良心の問題を照明することがフッサールの「カント講演」の隠された意図であつたということとを、〈超越論哲学はたんなる哲学的な世界文学ではない〉というフッサールのテーゼを吟味することから明らかにしたい(5)。

1. 厳密な学としての哲学という理念と超越論哲学の創設

フッサールの超越論的現象学とデカルトに始まりカントにおいて開花されたとされる超越論哲学との関係を探るために必要な準備作業として、フッサールの哲学的思索全体とデカルトとカントの哲学との関係について概観しておきたい。フッサールは、『厳密な学としての哲学』（一九一一年）のなかで次のように述べている。

哲学はその始まりから厳密な学であること、しかも最高の理論的欲求を満足させ、かつ倫理的—宗教的なものに関しては純粹な理性規範によって規則づけられた生を可能にする学であるという要求を掲げてきた。この要求は、〔……〕一度たりとも完全に放棄されるといふことがなかった（XXV, 3）。

〔この厳密な学は〕純粹で絶対的な認識に対する（そしてそれと同時に、この絶対的な認識と不可分に結びついて一つになっているもの、すなわち、純粹で絶対的な価値づけることと意欲することに対する）人類の不滅の要求を代表する学〔のことである〕（XXV, 4）。

理論的で絶対的な認識する働きとしての理性のみならず、倫理的—宗教的な問題にかかわる絶対的な価値づけや意欲する働きとしての理性の在り方を考究することによって、わたしたちの生全体を理性によって規制することを目指す学が厳密な学としての哲学の理念である。この理念を媒介として、フッサールは、自らの哲学的思索をソクラテス

— プラトンの思想的直系として位置づけ、さらにデカルトとカントと密接に結びつけている。

厳密な学に対するそのような十分に自覚された意志が、哲学のソクラテス—プラトンの転回を支配していたのであり、それと同じ様に、近世の始まりにおいてスコラ哲学に対する哲学的反動を、とりわけ、デカルト的転回を支配していたのである。その衝撃は十七、八世紀の偉大な哲学へと移行し、カントの理性批判においてもっとも根本的な力とともに刷新され、さらにフィヒテの哲学的営為を支配したのである。「このような哲学者たちによる」探究 *Forschung* は、「つねに新たに」、「哲学の」真の始原 *wahre Anfänge*、決定的な問題を形式化すること、正しい方法へと向けられてゐる (XXV, 6)。

ここで注目すべきことは次の二つである。第一に、厳密学という理念の継承者たちは皆、自ら新たな仕方で哲学の始原(端緒)を求め、哲学にとつての決定的な問題を定式化し、その問題と適切な仕方で格闘するための固有独自の方法を探求するという意志を持つ者である、ということ。第二に、この意志は、厳密な学としての哲学がその始まりから掲げ続けてきた要求に応答しようとする意志である、ということである。フッサールは、このような厳密学という理念をめぐる立ち現れてくる(要求とそれに応答する意志)という関係図式に基づいて、デカルトにおいて新たな哲学の形態が創設されたと考えている。その新しい哲学のスタイルの名称が「超越論哲学」である。

しかし、この超越論哲学の創設に関して注意しなければならないことがある。細川亮一は、「『超越論的と超越的は同一ではなす』(A 296 = B 352)と『純粹理性批判』にはつきりと書いてゐる」ことを典拠にして、哲学史において『超越論的—超越的』はカント以前において区別されず、カントが初めてこの区別を導入した」と指摘している。細

川は、カントによるこの二つの概念の区別を考える際に重要なポイントとなるものが「認識は、認識の起源に関しては超越論的と名づけられ、いかなる経験においても見出されない客観に関しては超越的と名づけられる」（『カント全集』18, S.10）」というカントの言葉であると述べている⁽⁴⁾。なるほど、この指摘にしたがえば、超越論哲学は、カントの『純粹理性批判』において開始されたと考えなければならぬ。しかし、フッサールは、デカルトの方法的懷疑による「エゴ・コギトの発見」に超越論的現象学の先行形態を認めることから、デカルトを超越論哲学の創始者とする解釈をとる（vgl. VII, 241）。フッサールは、こうした解釈を妥当とする根拠について『イデーナー』（一九一三）のなかでこう述べている。

〔超越論的という術語にかかわる〕このすべてのわたしたちの術語は、もっぱら、わたしたちの叙述がそれら〔術語〕に対して前もって指定する *vorzeichnen* 意味にしたがって理解されなければならないのであって、歴史あるいは読者の術語的習慣が喚起するような何らかの別の意味において理解されてはならない（III/1, 69）。

それゆえ、フッサールが使用する「超越論的」という術語は、哲学史上、これを初めて明確な仕方で定義したカントによる意味——「対象にかかわるというよりもむしろ、対象一般についてのわたしたちのアプリオリな概念にかかわるすべての認識を、わたしは超越論的と名づける。そのような概念の体系は超越論—哲学と呼ばれるだろう」（『純粹理性批判』A II-12）、あるいは「対象にかかわるというよりもむしろ、これ〔わたしたちの認識の仕方〕がアプリオリに可能であるべきかぎりにおいて、わたしたちの認識の仕方にかかわるすべての認識をわたしは超越論的と名づける。そのような概念の体系は、超越論—哲学と呼ばれるだろう」（『純粹理性批判』B 25）——をそのまま継承する

ような仕方では理解されてはならないということになる。この点を踏まえたうえで、フッサールの解釈における超越論哲学はどのような特性をもつ哲学なのか、という問いについて考えてみたい。

2. 超越論哲学の創始者としてのデカルト

先ほど述べたように、フッサールは、方法的懐疑によってエゴ・コギトを発見したデカルトを超越論哲学の創始者と考えたのであった。フッサールは、このデカルトの発見についてこう述べている。デカルトこそが「超越論哲学の先駆者」である。というのも、彼が、その『省察』において、固有独自の哲学的方法である方法的懐疑を使用することによって見出した「エゴ・コギト *das ego cogito* は、その深層の意味の理解にしたがえば、たしかに、超越論的主観性の発見の最初の形式と見なすことができる」からである、と (vgl. VII, 240 f.)。ここに、フッサールにとっての超越論哲学の特性が端的に表現されている。すなわち、超越論哲学は超越論的主観性の発見とともに開始される、ということである。

では、新たな哲学のスタイルである超越論哲学の始まりにかかわるこの超越論的主観性とは何か。フッサールは、「カント講演」とほぼ同時期に行われた『第一哲学 (1934/24) 第一部 批判的理念史』におけるデカルトへの言及のなかで次のように述べている。

合理主義者デカルトはまさに次のことによって近世を切り開いた。「すなわち、」彼はあらゆる認識の基礎づけのための絶対的な土台としての内在的な領圏への通路を切り開いたことによって近世を切り開いた (VII, 183)。

フッサールの超越論的主観性とは、この引用において、「あらゆる認識の基礎づけのための絶対的な土台」である「内在的な領圏」と表現されているものに他ならない。デカルトは、方法的懐疑によって「懐疑主義的な議論の根底にあるまったく疑うことのできない真なるものに、初めて理論的に十分な仕方で応じようと試みた」(VII, 61)のであった。この試みのなかで「まったく疑うことのできない真なるもの」として発見されたものが、「我思う、我在り *ego cogito, ego sum*」(VII, 63)において、「あらゆる認識の基礎づけのための絶対的な土台」となる「エゴ・コギト」であった。この「エゴ・コギト」とは、「純粹で、それ自身において完結した認識主観性」(VII, 284)、いっそう詳しく言えば、「それ自身において完結した、絶対的な不可疑性における超越論的に純粹な主観性、いついかなるときでも己れ自身に気づくことができる主観性」(VII, 63)のことである。これをフッサールは、絶対的な「内在的な領圏」としての「超越論的主観性」と呼ぶ。この意味において、デカルトは「超越論的主観主義 *der transzendente Subjektivismus*」(VII, 61)に立脚した新たな哲学のスタイルである超越論哲学の創始者なのである⁽⁵⁾。

しかし、なるほどデカルトは超越論哲学の創始者ではあったが、彼によって開始された超越論哲学は、フッサールから見れば致命的な欠点をもつ不完全なものであった。というのも、「デカルトの『省察』によって最初の現実的な現存在」として人類の歴史にその姿を現した超越論哲学は、十全なものではなく、その「萌芽形態 *Keimgestalt*」でしかなかったからである (vgl. VII, 284)。デカルトによって最初に示された超越論哲学が未熟な萌芽形態でしかなかった、というこの主張は、「カント講演」以降も、フッサールによって繰り返し主張されることになる (「ヨーロッパ諸学問の危機と超越論的現象学」(1936) 第一八節参照)。

しかし、なぜデカルトの超越論哲学は未熟な萌芽形態であると批判されるのだろうか。フッサールの批判の要点を端的に表現すればこうだ。デカルトは、「自分が発見した純粹なエゴ」を「直接性において唯一与えられている客観

的世界の「断片」である人間としてのわたしの心と同一視してしまったのだ、と (vgl. VII, 73)。

フッサールによると、デカルトが発見した「我(エゴ)」は本来このような(人間的主観性(人間としてのわたし)を己れ自身の表面とする深層の次元で、隠れた仕方で機能している超越論的な働きである)超越論的主観性であったのに、彼自身はそれを出来上がった表面の一部である心ないし精神と同一視したために取り逃がしてしまった。世界は可疑的だが既存していてその真の姿は(人間としてのわたしの)心から演繹できるといふわけである⁽⁶⁾。

人間的な主観性と超越論的主観性との区別に対する無理解、これこそ超越論哲学に関するデカルトの未熟さである。フッサールにとって、この未熟さを克服しようとした者がカントであった。

3. 超越論哲学の開花者としてのカント

フッサールは、デカルトによる萌芽形態としての超越論哲学をいっそうしつかりとした形で開花させた哲学者がカントであった、と考えていた。その理由はこうだ。「なるほど、実際のところ、カントの探究全体は、超越論的主観性という絶対的な地盤のうえで行われている *sich abspielen*、とわたしたちは言うことができるだろう。おまけに彼は、他に例を見ないほどの *beispiellos* 直観的能力によって、その比類ない意義をもち、かつて誰一人として予感することのなかったこの「超越論的」主観性のなかにある本質構造を見抜いていた」(VII, 197)のだから、と。

では、カントにおいて超越論哲学は、いわば何の文句もない状態で十全的に展開されたのであろうか。この問いに対するフッサールの答えは、否である。フッサールは、上述のようにカントを高く評価しながらも、カントによる超越論哲学全体を手放して賞賛されるべきものであるとは考えていない。それはなぜか。カントの超越論哲学のいったい何が問題なのだろうか。

フッサールは、「カント講演」において、カントの超越論哲学の問題点を、密接に関連する二つの視点から指摘する。第一の指摘は、カントの哲学的思索が「ヴォルフの存在論から出発」したことによって、彼の超越論哲学における「超越論的態度」は「存在論的に関心づけられたまま」であり、その結果、「彼の問題構成」は「ほとんどっぱら、意味形態ないし真理形態、さらに客観的な〔存在〕妥当という点で必然的にそれら〔意味形態と真理形態〕に適合する意味契機だけ」にかかわるものとなってしまった、というものである (vgl. VII, 281)。この第一の指摘の意味を明らかにするため、第二の指摘をみてみよう。

〔たしかに、カントは、超越論的主観性のなかにある本質構造を見抜いていた。〕しかし他方で、彼は、働いている〔超越論的〕主観性とその意識の機能についての、そのなかであらゆる種類の客観的意味と客観的正しさが形作られる受動的な意識総合と能動的な意識総合についての具体的な仕方で直観される相関的研究を体系的に行うことを、彼の問題構成を片付けるためには不要であるとみなしている。たとえばこれほど——とりわけ〔純粹理性批判〕第一版のなかで——「主観的演繹」というタイトルのもとで——彼が〔超越論的主観性の働きとしての〕意味付与する意識生のアプリオリと意味付与と意味そのものとの連関のアプリオリへと初めて深い洞察のままざしを向けたにせよ、やはり彼は、彼が行うことができると思じたほどに、超越論哲学を狭めることが許

されないということを確認してはいない。さらには、そのような哲学を徹底的に明晰な仕方ですべての側面に応じて研究され、また完全に個別化されたうえで研究されなければならないという場合であるということも認識してはいない（VII, 281）。

第一の指摘でのカントの超越論哲学における存在論的問題は、超越論的主観性の働きを解明することによってしか解答することができない問題である。なぜならば、カントが解決しなかった——とフッサールが考えていた——「客観的な〔存在という〕意味形態についての超越論的理論は、客観的な〔存在という〕意味を形成する生の超越論的本質探究から不可分であることはできない」（VII, 281 f.）からである。カントはこのことを見落としてしまったために、彼の存在論的関心にしたがって、超越論哲学の探究領域をもつばら超越論的主観性の働きによって構成された、何らかの存在者に制限してしまつた。フッサールは、カントのこの点を指摘しつつ、カントが超越論哲学を狭めてしまつた、と批判するのである。

以上のことに基づいて、フッサールにとつての十全的な仕方でも展開された超越論哲学の根本特性を明示することができる。すなわち、「統一的な超越論的主観性、具体的に直観的な超越論的主観性の枠内での意識生と意識の働き」（VII, 281）を余すところなく全面的に探究することがフッサールにとつての超越論哲学の根本特性である、と。フッサールは、デカルトに始まり、カントによって開花した超越論哲学が最終的には超越論的現象学として結実する、と述べている。

それ〔超越論的理論〕は、最終的に、〔超越論的〕意識一般の普遍的本質研究へと——「超越論的現象学」へと廻行的に還帰する。まさにこのことが、カントに固有独自の「超越論的」という概念の拡大を強いる。「そして」その拡大こそが、その始まりから、わたしたちの〔この「カント講演」での〕叙述の基礎をなしていたのである（VII, 282）。

4. 超越論哲学の徹底者としてのフッサール

ここで、これまでの議論を整理しておきたい。フッサールは、デカルトに始まり、カントによって開花した超越論哲学と自らの超越論的現象学との間に、次の二つの意味で密接なつながりを見ていた。

第一に、デカルトとカントの超越論哲学とフッサールの超越論的現象学はともに、厳密な学としての哲学という理念を継承しつつ、自ら新たな仕方での哲学の始原を求め、哲学にとつての決定的な問題を定式化し、その問題と適切な仕方とで格闘するための固有独自の方法を探究するという意志から行われた哲学であったこと。第二に、デカルトとカントの超越論哲学とフッサールの超越論的現象学はともに、「超越論的主観性」という超越論哲学に固有独自の主題を発見したことであった。フッサールは、このつながりにおいて、「わたしの『イデー』の純粹あるいは超越論的現象学」と「カントの超越論哲学との間には明確な本質類縁性」がある、と明言する（vgl. VII, 230）。

しかし同時に、フッサールは、超越論的現象学とデカルトとカントの超越論哲学との間には決定的な差違がある、とも主張する。その差違とは、人間的主観性と超越論的主観性とを明確に区別するということに気づいているということ（デカルトの超越論哲学との決定的な差違）であり、超越論哲学は、超越論的主観性の働きによって構成された

存在者の在り方のみならず、超越論的主観性の働きそのものの在り方も探究しなければならないということである（カントの超越論哲学との決定的な差違）。デカルトとカントの超越論哲学との同一性（本質類縁性）と差違を考慮しつつ彼らの超越論哲学を徹底化したもの、これが「カント講演」において提示される超越論的現象学である。フッサールは、この超越論的現象学について次のように説明している。

ひとが超越論的な思考法についてまったく何も知らなかったというかぎりで、自然的な思考法は、およそ経験可能な存在のすべてと思考可能な学問のすべてをそれ自身のうちに把握しているように見える。しかしいまや、〔……超越論的現象学によって〕ある新たな存在領圏が開示される。〔……〕この新たな〔超越論的な〕思考法が追究されるならば、ひとがついさつきまで自然的に基礎づけられた正しさの自明性において占有していたものすべてが問いに付されることになるように思われる。〔……超越論的現象学は、〕まさに、超越論的な認識領圏のかへともっとも真剣にかつもっとも深く入りこんで世界の意味を、自然的に思考する者にとっては〔……〕——少なくともさしあたりは、まったく許容できない仕方で現出するに違いないような世界の意味を要求するように思われる〔……〕（VII, 270 f.）。

このように説明される超越論的現象学は、とくにカントとは異なる仕方でも、固有独自の仕方でも「現象」を超越論的に問い直す。ここで問い直される「現象」とは、「超越論的事実性の統一宇宙」としての「現象」、「可能的な超越論的经验」の統一宇宙」としての「現象」である。超越論的現象学は、この意味での「現象」に「相応する普遍的な経験理論という課題」を打ち立て、その課題を解決することに専心する（vgl. VII, 256 f.）^②。

5. 超越論哲学の正当な継承者としてのフッサール

——超越論哲学という「実践がもつ理論的機能」の継承——

しかし、デカルトやカントの超越論哲学の不備を指摘し、それを正しつつ、徹底化したものとして超越論的現象学をわたしたちに提示することが、フッサールの「カント講演」のねらいだったのだろうか。フッサールは、デカルトやカントの超越論哲学に対する超越論的現象学の完全性や成熟度の高さを主張するためだけに「カント講演」を行ったのだろうか。この問いに対する論者の答えは、否である。論者は、フッサールの「カント講演」にはさらに重要な意図が隠されていたと考えている。それは次のようなものである。デカルトとカントの超越論哲学は、厳密学という理念をめぐって立ち現れてくる〈要求とそれに応答する意志〉という独特の關係に基づいて成立するものであることから必然的に、わたしたちの生に対する特別な機能を有している。その特別な機能とは、超越論哲学という「実践がもつ理論的機能」(VII, 283)のことである。超越論的現象学は、徹底化された超越論哲学として、この「理論的機能」を正当な仕方で継承している。フッサールは、この「実践がもつ理論的機能」がわたしたちの生に対してもつ比類ない意義とこの意義と不可分に一つになっている哲学的な良心の問題を今一度、照らし出すために、「カント講演」において、デカルトとカントの超越論哲学との關係に言及しつつ超越論的現象学を提示したのである。これこそ、フッサールの「カント講演」の隠された意図である、と。最後に、このように論者が主張する根拠を、〈超越論哲学はたんなる哲学的な世界文学ではない〉というフッサールのテーゼを吟味することから明らかにしたい⁽⁸⁾。

まず、徹底化された超越論哲学としての超越論的現象学が、わたしたちの生に対してもつ比類ない意義とは何か。

この問いについて考えてみよう。フッサールは、超越論哲学が、わたしたちが普通に生きている時に理解している世界、換言すれば、自然的な思考法において理解されている限りでの「この世界の支配者たち、政治家、エンジニア、企業家にとつては何の役にも立たない」「まったく無用の技術」である、と述べている。しかし、このことは、超越論哲学があらゆる人々にとつてあらゆる場面でまったく役に立たないものである、ということの意味してはいない。これは、超越論哲学がある特定の人々にとつては比類ない、固有独自の意義をもつ、という主張である。その意義とは、超越論哲学が「高次の意味での、真の世界、〔超越論的主観性という〕絶対的な精神による世界へと至る唯一可能な入門をわたしたちに開示する」という意義である。フッサールは、この意義を超越論哲学という「実践がもつ理論的機能 *theoretische Funktion einer Praxis*、まさに、そのなかで、人間性についての最高かつ究極の関心が必然的な仕方でも獲得されなければならないような実践がもつ理論的機能」と表現する (vgl. VII, 283)。

しかし、すでに見たように、超越論哲学に固有のこの機能は、普通に日常生活を送っている大多数の人々にとつては不要の機能である。なぜなら、超越論哲学によつて開示される世界が、そのような大多数の人々にとつては「まったく許容できない仕方でも現出するに違いないような世界」であるからだ。超越論哲学を実践することによつて引き起こされる「自然的な思考法の転換において、わたしたちは、世界そのものの代わりに『世界』についての意識だけをもち」(VII, 271) ようになる。この後者の、引用符で括られた世界についての意識こそ、超越論的現象学の「現象」としての「超越論的事実性の統一宇宙」に他ならない。わたしたちは、この「現象」としての、「超越論的事実性の統一宇宙」としての「世界」についての意識」を探究することによつて初めて、そして唯一この探究の仕方においてのみ、超越論的主観性の働きを媒介とするわたしの意識とわたしが生きているこの世界との不断の志向的相關関係を理解できるようになる。フッサールが、超越論哲学という「実践がもつ理論的機能」を「人間性についての最高か

「究極の関心」にかかわるものと規定した意味もここにある。わたしたち人間とは何か、わたしたち人間が生きていくこの世界とは何か、そしてまた、わたしと世界はどのような関係にあるのか。こうした問いに対して、超越論的現象学は、自然的な思考法ではけつして与えられない一つの答えをわたしたちに提供する。これが、徹底化された超越論哲学としての超越論的現象学が、わたしたちの生に対してもつ比類ない意義である。

しかし、ここにさらに重要な問題がある。それは、超越論的現象学を実践するという意志決断にかかわる問題である。「超越論的」現象学は、それを人々が読むことで、いわば乗り物に乗って出かけていくような『文学』ではない。人々はすでに、——なんであれ真正の学問においてそうであるように——それを我が物として、方法的に訓練されたまなざしとそれゆえ己れ自身で判断するという能力を初めて獲得するために活動していなければならぬ」(VII, 238)。徹底化された超越論哲学としての超越論的現象学は、「わたしたちの時代の哲学的な世界文学 *philosophische Weltliteratur*」(VII, 289) ではない。フッサールは、わたしたちがデカルトの『省察』を、カントの『純粹理性批判』をただ読むだけでは、あるいはフッサールの「カント講演」を聴くだけではまったく十分ではない、と考えている。本当に大切なことは、デカルトやカントを読むことでも、フッサールの講演を聴くことでもなく、自分自身で超越論哲学を生きってみること、わたしがわたしの生のなかで超越論的現象学を実践することである。というのも、超越論哲学を生きること、超越論的現象学を実践することの意義——それが開示する真の世界が本当に真の世界であるかどうか、その世界がいかなる意味で真の世界であると言われるのか、というような問いに対する答え——は他人によって教示されたものによって済まされるようなものではなく、己れの身をもって考え判断すべきものだからである⁽⁹⁾。それはなぜか。その理由は、このような超越論的現象学を実践するという意志決断にかかわる問題が、わたしの義務に関係する哲学的な「良心の声、絶対的なべし」(XII, 390) の問題だからである。

良心の主体としての自我とは、これからの生全体にとって意義を留め続けるような（……）留まる価値の自我としての生全体の自我のことである。（「留まる価値とは、」母親にとっての子ども、市民にとっての祖国、学者にとっての学問、芸術家にとっての芸術（「のような価値のことである」）（XII, 420）。

わたしの生全体にとって意義を留め続けるような価値とはどのような価値か。その価値を決める主体は、わたし以外にはありえないし、わたし以外の者であってはならない⁽⁹⁾。上述の引用でフッサールが挙例している価値もけつして例外ではない。我が子を育てることを徹底的に拒否する親も存在するであろう。祖国を裏切ることへの痛痒も感じない市民も存在するだろう。学問や芸術それ自体にまったく価値を認めず、学問や芸術をたんなる金儲けの手段としか考えないような学者や芸術家も存在するであろう。超越論的現象学に関しても事態はまったく同様である。たとえそれが「人間性についての最高かつ究極の関心」にかかわる問題を解くための唯一の方法であったとしても、そもそも人間性についてのこうした関心にまったく価値を見出さないような人々にとって超越論的現象学は、「まったく無用の技術」ではない。

しかし、だとすれば、かの時フッサールにはいったい何が残されていたのだろうか。フッサールの答えは明快である。わたしは、わたしの良心の声に応答し、わたしの義務、わたしの絶対的なべしを果たすだけである、と。わたしの義務とは、デカルトが開始し、カントによって開花した超越論哲学が開示する「まったく新種の、それ自身において絶対的に完結した認識の王国」をさらに徹底的に「開拓」することである。というのも、超越論哲学は、「自然的な思考法全体を徹底的に転換する」という途方もない試みであり、その実現には「数世紀にも及ぶ作業が必要」であるからだ。まずは、彼らの手によつては、ついに「完全に得心のいく明証」を与えられなかった、超越論哲学に付着

していた「もろもろの前提」を除去しなければならない。その後で、そうした「前提をもたず、それ自身において明証的な始原にまで突き進んでいくこと、事象に適った方法を作り上げること、実際に根源的な問題構制を構想すること、そして最終的には、最終妥当的に責任を負わされるべき理論を体系的に築き上げること」を指さなければならぬ。こうした非常に困難な「未来に据え置かれた課題」に従事する超越論的現象学を実践していくこと、これこそが唯一フッサールに残されていたものであり、彼が「カント講演」において身をもって示したかったことなのである（vgl. VII, 282）。

徹底化された超越論哲学としての超越論的現象学が取り組まなければならないこの「未来に据え置かれた課題」は、本論1で指摘した、厳密学という理念の継承者に対する〈要求とそれに応答する意志〉との関係図式において、顕在化してくる課題と一致するものである。フッサールは、この一致について、「カント講演」のなかではまったく言及していない。しかし、超越論哲学は厳密学という理念の継承者によって創始され、開花され、徹底化された、というフッサールの視点に立つことによって、わたしたちは哲学的な良心の問題としての超越論哲学の実践をめぐる問題と向き合うことになるのである。

おわりに

「カント講演」における超越論哲学は、厳密学という理念をめぐる立ち現れてくる〈要求とそれに応答する意志〉という関係図式に基づいて、デカルトにおいて新たな哲学の形態として創設されたものであった。この新たな哲学のスタイルとしての超越論哲学は、その後、カントにおいていっそう明確な仕方で開花したのであった。しかし、カン

トの超越論哲学は、その探究領域をもつばら超越論的主観性の働きによって構成された、何らかの存在者に制限してしまつたために、フッサールから見れば、いまだ十分に展開されていないものであつた。そこで、フッサールは、カントの超越論哲学との本質類縁性と差違をしっかりと意識したうえで、徹底化された超越論哲学としての超越論的現象学を提示したのであつた。この徹底化された超越論哲学としての超越論的現象学は、具体的に直観的な超越論的主観性の枠内での意識生と意識の働きを余すところなく全面的に探究するという根本特性をもつていた。本論は、「カント講演」を手引きにしつつ、以上のことを明らかにしたのであつた。そして、さらにそこから、「カント講演」に隠されたフッサールの意図について検討した。超越論的現象学を實踐することには、わたしたちの生にとつて比類ない意義をもつ、それ固有の「理論的機能」がある。しかし、この超越論的現象学を實踐するかどうかという意志決断の問題がじつはわたしの生全体に及ぶ、わたしの義務にかかわる哲学的な良心の問題であるということ、このことに對して今一度、光を当てること「カント講演」におけるフッサールの隠された意図であつたということを本論は、指摘した。もちろん、この指摘の正否を弁別するためには、フッサールの良心概念をさらに詳しく検討しなければならぬだろう。これは今後の課題とし、稿を改めて取り組むこととしたい。

注

フッサール全集 (Husserliana, Martinus Nijhoff/Kluwer/Springer, 1950-) からの引用は巻数をローマ数字で、頁数をアラビア数字で表記する。

- (1) 工藤和男『フッサール現象学の理路——『デカルト的省察』研究——』晃洋書房、二〇〇一年、一頁。
- (2) フッサールは『イデーニー』第三三節において、現象学的還元による「純粹意識（超越論的主観性）」の獲得とのかかわりのなかで、「超越論的」という術語についてこう述べている。「わたしたちの術語について、さらに以下のことを付け加えて

おきたい。認識論的な問題構制に基づく重要な動機は、(以下で)非常に頻繁に話題にされる『純粹』意識を、わたしたちが超越論的意識とも呼び、さらにまたそれが獲得される操作を超越論的エポケーと呼ぶことを正当化する(III1, 68f)。「現象学という語やそのもの派生語は多義的である。ここで目指されているのは、〔……〕一つのまったく特殊な現象学であり、そのいっそう明確な呼び名が超越論的現象学ということになる」(III2, 593)と。これに関して渡辺二郎は、フッサールの「超越論的」という語が次の三つの意味をもつことを指摘している。

- (1)「超越的」transzendētなもの、「超越物」Transzendenzは、意識に「対立しているもの」、意識とは「原理的には別なもの」であり、「世界」および「一切の世界的客観」がこれに当たるが、しかしこれらのものは、「意識のうちでおのれを呈示してくる(sich bekunden)存在」であって、「私の経験」からその「存在意味」や「存在妥当」を汲み取ってくるものであり、「超越論的」transzendentalなものとは、まさに右のような「意識」や「自我」のことにはかならず、したがって、世界と意識との「相関関係」を考える哲学の問題はすべて、超越論的な問題になる〔……〕。(2)右のようなものであるから、「超越論的」な問題は、「他の一切の諸学問」にも関係し、「世界」全体にわたる「全般的」universalな問題であり、「世界」を「その全き全般的性において」、その意味と妥当に関して問い直す「全般的、普遍的な哲学」universal Philosophieの形成意志と関連してくる〔……〕。(3)そして最晩年にいたって、「超越論的」とは、デカルト以来の近世哲学全体に貫流する哲学上の「本源の動機」とされ、「一切の認識形式の究極源泉へと戻って問うという動機、認識者の自己自身への、また自己の認識生活への、自己省察への動機」のことと規定され、究極的基礎づけを具えた普遍的哲学への動機のことと説明されるようになる〔……〕(渡辺二郎「訳注」エトムント・フッサール『イデーニー——純粹現象学と現象学的哲学のための諸構想 第一巻 純粹現象学への全般的序論——』渡辺二郎訳、みすず書房、一九七九年、三六九頁参照)。

また、ドラモンドは、「心理的なもの」と対比させつつこの「超越論的なもの」の概念規定が超越論的現象学の成立と形成に果たした重要な役割について論じている(Drummond, J. J., *The Transcendental and The Psychological*, in: *Husserl Studies* 24, pp.193-204, 2008.)。

- (3) *Husserliana* Bd. VII, S.230-287. の講演は、一九二四年五月一日にフライブルク大学においてカント生誕200年を記念し

- て行われた祝賀会での講演である。
- (4) 細川亮一「超越論哲学と形而上学」三四頁。二〇一五年十二月十五日、web online available (<http://catalog.lib.kyushu-u.ac.jp/handle/2324/6486/KJ100004493874.pdf>)。
- (5) フッサール『第一哲学講義』におけるデカルトの位置づけに関しては以下の論文に詳しい。榎原哲也「8章 フッサールの哲学史観」『西洋哲学史観と時代区分』哲学史研究会編、昭和堂、二〇〇四年。
- (6) 工藤和男「フッサールにおける主観性の射程」『同志社哲学年報』第二十七号、同志社哲学会編、二〇〇四年、二五頁。
- (7) 工藤は、このフッサールの「現象」についてこう述べている。「重要なのは、〔超越論的〕現象学において、哲学の伝統の中でほとんど取り扱われることのなかった、真実在 (noumenon) と現象 (phänomenon) という二分法的枠組が破壊されているということである。この枠組は、〔……〕存在者全体を二分、しかもどちらかに認識論的あるいは存在論的な優位を与えるような価値づけを伴う区分であった。〔……〕フッサールの現象概念は、外界と内界、実在と仮象、現実と可能、そして伝統的な、実体と属性、などの区分がそもそもそこから初めて意味を持つことになるような、意味の地盤、考えうる存在者のすべてを包括する地盤を指しているのである。それゆえ、カントが認識できぬが想定しようとして哲学解明に導入した『物自体』もまた、その『現象』との二分法と共に、フッサールの意味での現象によって初めて可能であり、これに含まれることになる」(工藤、二〇〇一年、前掲書、二七―二八頁)、と。
- (8) ゲーテによる「世界文学」概念については、以下の論文を参照のこと。MURA, K., 'Über Goethes Begriff der Weltliteratur aus heutiger Sicht: Auf der Suche nach einem neuen Paradigma von Weltliteratur' (三浦國泰「今日の視点から見たゲーテの『世界文学』概念——世界文学の新たなパラダイムを求めて——」『成蹊大学文学部紀要』第四八号、二〇一三年、二一七―二二三頁)。
- (9) フッサールは、カントの超越論哲学によって発見されたものすべてに「自分自身を占有するために、自分自身を獲得せよ! Erwirb mich, um mich zu besitzen!」という銘が刻まれている、と述べている (vgl. VII, 282)。論者は、フッサールのこの発言を、ひとは哲学を学ぶことはできず、自ら哲学することを学ぶことができるだけである、というカントの『純粹理性批判』(A 837, B 865) の言葉と照らし合わせて、自ら実践すること、自分自身でやってみることの大切さを表現するためのものであると解釈する。
- (10) この哲学的な良心の問題を、川島秀一は、「人間の生き方の意味と、意味ある生き方とに関する問題」、「人間としての無条

件に価値ある生き方、もしくはは無条件に価値ある決意と行為の在り方」に関する「倫理学の最も根本的な問題である」と述べている（川島秀一『倫理的探究の基礎的諸問題』三和書房、一九六九年、一九—二〇頁参照）。

